

小学校音楽授業における器楽指導の内容と方法に関する研究

—子どもたちの主体的な学びを呼び起こす鍵盤ハーモニカの指導を求めて—

教科・領域教育専攻

芸術系コース（音楽）

山口 祥枝

指導教員 長島 真人

はじめに

現在、鍵盤ハーモニカは、音楽授業には欠かせない楽器となっている。しかし、第3学年からは、「子どもが飽きてしまうから」などの理由から、鍵盤ハーモニカを授業で使う機会は少なくなっていく。ここにみられる問題は、子どもたちが夢中になって取り組む活動が行われていないこと、教師が鍵盤ハーモニカの魅力や有効性を知らないことであると思われる。子どもたちの確実な演奏技能の習得には、子どもたちが夢中になれるような活動と、子どもたちの中から生まれる主体的な学びが必要である。そこで、本研究は、器楽における演奏技能の習得の特性を吟味し、小学校の音楽授業において、子どもたちの鍵盤ハーモニカに対する主体的な学びを呼び起こす指導の内容と方法を検討することを目的とする。

1. 学習指導要領にみられる器楽指導の目的と指導内容

器楽指導の特性について記述されている書籍を調べ、整理すると、以下の3点にまとめられる。①声楽と並び、自己表現の重要な手段の一つである。②幅広い表現技法の可能性がある。③集団で音を合わせて演奏する喜びを味わうことができる。器楽指導を教育的に価値のあるものにしていくためには、これらの特性を踏まえて、授業を構想、展開する必要がある。

小学校の音楽科教育の指導内容は、表現と鑑賞の2領域に分けられ、さらに、表現は、歌唱、器楽、音楽づくりの3分野に分けられている。小学校学習指導要領の器楽の内容は、聴奏及び視奏の能力の育成、音楽を感じ取って表現を工夫する能力の育成、楽器の特長やよさを生かして表現する能力の育成、音を合わせて演奏する能力の育成について示されている。器楽の指導内容は段階的に構成されており、子どもたちが身に付けるべき力も学年が上がるにつれて高度になっているため、子どもたちの器楽活動への関心を持続させつつ確実に力をつけることができるような指導が必要である。

2. 小学校音楽授業における鍵盤ハーモニカの指導の現状と課題

鍵盤ハーモニカの主な特長として、鍵盤楽器と吹奏楽器の両方の機能があること、すべての音楽活動に用いることができることが挙げられる。鍵盤ハーモニカを活用した授業の実践事例は多数あり、使い方によっては中学年、高学年でも十分に活用できる。しかし、指導に悩んでいたたり、鍵盤ハーモニカを演奏せずに指導していたりする教師も多い。教師一人ひとりが鍵盤ハーモニカの特徴や有効性を理解し、器楽活動のあり方や、子どもたちの主体的な学びを引き出すことに注目する必要がある。そこで、鍵盤ハーモニカの取扱いについて、2社の現行の音

楽教科書を検討した。A社の音楽教科書は、子どもたちが身に付ける技術が、易しいものから難しいものへと配列されており、階名唱と運指の技術の練習に留まっていることが確認された。B社の音楽教科書は、先に音楽を提示し、子どもたちに関心をもたせ、音楽表現を工夫していく中で必要な演奏技能を習得できるようになっていることが確認された。本研究の目的にある子どもたちの主体的な学びという観点から見ると、B社の音楽教科書の特質をさらに深く理解する必要がある。

3. 日本の伝統芸道にみられる「わざ」の習得と小学校の音楽授業における演奏技能の習得

主体的な学びを呼び起こす器楽における演奏技能の習得の特性を明らかにするため、日本の伝統芸道にみられる「わざ」の習得の特性に着目した。日本の伝統芸道の学習者は、人から強いられて学んでいるのではなく、師匠からより多くのことを学び取ろうとして、主体的な学びを展開している。学習者は、師匠が示す「形」を「善いもの」として同意し、模倣活動を通して、その「形」を自分のものにしようと探究する。次第に単なる模倣活動から離れ、自ら生成した目標をより豊かに広げていき、その目標に照らしながら「形」の意味を自分なりに解釈し、全体的な活動の意味を探っていく。最終的に、当の「わざ」の世界の事柄の意味を身体全体で解釈していくことによって、師匠が示す「形」をも含む当の「わざ」の世界に存在するすべての物事を、一つのつながりとして把握できるようになる。学習者は、各世界の「わざ」を要素の集合ではなく、常に全体としてとらえることによって、各世界の「型」を習得している。

日本の伝統芸道における「わざ」の習得の特性が、小学校の音楽授業の演奏技能の学習に示

唆する側面は以下の4点にまとめることができた。①演奏技能は音楽の流れの中で習得される。②教師が楽器を演奏する行為の中にみられる「善さ」を子どもが見出し、これを認めることができるような学習環境を作る。③演奏技能の習得には、子どもの「解釈の努力」が必要である。④演奏技能を習得するということは、完全に自分のものにしてしまうということである。子どもたちが主体的に学ぶことによって、演奏技能が自分のものとして定着し、より豊かに音楽を表現することができるようになる。

4. 子どもたちの主体的な学びを呼び起こす鍵盤ハーモニカの指導上の留意点

ここまでの研究によって明らかにした器楽における演奏技能の習得の特性に基づいて、小学校の音楽授業における鍵盤ハーモニカの学習を支援するために、以下の4点に留意する必要がある。①子どもたちがより豊かな音楽表現を目指す中で、演奏技能を習得できるようにする。②子どもたちが真似したくなるような遊びや演奏を教師が示す。③教師は、子どもたちが自ら進んで探究できるような工夫や言葉かけをする。④子どもたち一人ひとりが自分特有の演奏をすることができるようにする。これらのことを踏まえて具体的な学習指導過程を構想、展開する必要がある。

おわりに

本研究を通して、器楽における演奏技能の習得の特性を明らかにし、小学校の音楽授業における鍵盤ハーモニカの学習のあり方を見出すことができた。今後は、本研究で得られた器楽における演奏技能の習得の特性を基礎に置き、小学校の音楽授業における鍵盤ハーモニカの学習の実践的研究など、様々な研究を行う必要がある。